

戦時下日本人のシルクロードと中国少数民族イメージ (松本 ますみ)

## アジア・太平洋研究センター主催，外国語学部アジア学科共 催講演会

日 時：2017 年 10 月 13 日（金）

場 所：J 棟 1 階 特別合同研究室

テーマ：戦時下日本人のシルクロードと中国少数民族イメージ

報告者：松本 ますみ（室蘭工業大学教授）



2013 年に中国の習近平主席が提唱し，翌年に広く知られるようになった“一帯一路”構想は別名“海と陸のシルクロード”構想とも言われる。その言説の歴史をひも解いてみよう。近代のシルクロードブームは，都合四期ある。第一期が，西欧の探検家によるもので，19 世紀末のいわゆるグレートゲーム時代から始まり，1930 年代まで続いた。敦煌文書の発見はこの時期のものである。第二期が日本によるもので，東亜での日本の優位性と将来的世界支配という壮大な軍事計画のもとに，中国周縁部の人文地理を知るべく研究者と広報としてのメディアが総動員された時期（1930 年代から 1945 年まで）のものである。第三期は，高度成長期の日本におけるもので，1960 年代から日中国交正常化をはさんで 1980 年代までの「日中友好期」のことである。日本文化ブームと NHK 番組とあいまって日本文化のルーツを遠くユーラシア大陸のかなたに求める知的好奇心のもとに，古代の沙漠の道がクローズアップされた。第四期が現在の一帯一路構想の時期で，中国国内ではシルクロード（丝绸之路）という名称もあいまって，時代のキーワードとなっている。どの期においても，中国周縁から中央アジアにかけて「未知」なものとヒトを知り，自らの味方にする，という意味では同様の現象としてブームが巻き起こっているといっても過言ではない。

本講演では、特に第二期に焦点を当て、戦時下の日本の大衆グラフ誌に頻繁に表われた中国「少数民族」像（特に、モンゴル人と中国ムスリム）と日本軍部と学界のシルクロード言説の相関性を検証した。特に、帝国の学問としての「東洋史」のあり方とブームの作られ方に関して問題を提起した。さらには、『漠北と南海』を上梓した松田壽男に注目し、漠北＝現在の「一路」南海＝「一带」との類似概念を指摘した。

松田の言説を検討することで、東洋史学者の国策への積極的協力の姿をみた。それは、一言でいえば、現在の「中国少数民族」を「支那」から切り離して考える、という視点である。そして、他の被植民地化されたアジアの合同体の上に日本の支配を正当化するというものである。特に、歴史的に漢人と反目し続けてきた（とされた）モンゴル人と中国ムスリムは、「敵の敵は味方」理論のもとに日本の明らかな「友」と描かれた。彼らの故地草原や沙漠は、その豊かな資源とあいまって日本の軍事拡張にあらたな夢を描かせるに十分であった。

戦後、中国と国交回復がない時代に日本は経済復興を成し遂げ、その自信が、戦時中の「東西交流」言説と日本文化を再度接続させた。日中国交回復、改革開放後の中国ブームの中で、日本のメディアを飾ったのは中国の中でも「周縁」のシルクロードと遊牧民やムスリムという民であった。それは、日中戦争や満洲国といった侵略行為を検証・自省するのではなく「見知ったような気がする仏教遺跡」を見せる行為であった。視聴者が一番知りたかったのは、自分たちの文化のルーツであった。思えば、大陸のまだ見ぬ土地と民の「なぞ探し」に熱中したのは、日本の帝国主義の時代と高度成長期であった。戦後、日中関係を良好にするために、持ち出されたのがシルクロードであるとすれば、これは意図的な論理ずらしである。逆に、日本の現在の対中ナショナリズムは、戦前から温存された「中国軽視」「文化的中国」観という伏流水が噴出したものであるともいえる。

（文責：松本 ますみ）